

豊田市中心市街地に関する基礎的研究

豊田工業高等専門学校 ○ 野田 宏治

名城大学 栗本 譲

豊田工業高等専門学校 荻野 弘

1. はじめに

近年の中小地方都市において中心商業地区の衰退が社会問題として取り上げられるようになってきた。中心商業地区の衰退が著しかった豊田市では、昭和63年に中心商業地区である名鉄豊田市駅と愛知環状鉄道新豊田市駅周辺の豊田市駅西口市街地再開発事業が完成した。同時にその地区の中心に豊田市としては初めての百貨店“豊田そごう”が開店した。

本研究では、平成元年11月に市民を対象に実施した“買物と生活に関する調査”の分析結果と既存の統計資料とから、豊田市の商業中心地区における活性化の効果と購買行動とを明らかにし、また再開発事業完成後の商業中心地区を主な利用者である豊田市民がどのような都市機能として捉えているのかを分析し、今後の都市整備の課題等を明らかにする。

2. 時系列で見た買物動向

図-1は豊田市民がどの地区で買物をしているのかを買物品別に示したもので、これらの地区にはそれぞれ最低1カ所の大規模な駐車場をもったスーパーマーケットや生協などのショッピングセンターがある。

買回品についてみると、豊田市駅周辺での割合が昭和53年には45%以上あったものが昭和56年には25%まで下がり、昭和59年は同様であったが昭和62年には20%以下にまで落ち込んでいる。ところが豊田市駅西口市街地再開発事業完成後の平成元年には25%にまで増

加している。土橋地区は昭和56年の10%から昭和62年の6%まで減少し、平成元年もほとんど変化していない。広路町は年度による大きな変化はみられず20%前後で推移している。一方、三河豊田駅周辺では昭和56年の18%から昭和62年は27%まで増加しているが、平成元年には10%に減少している。

最寄品は三河豊田駅周辺だけが昭和62年の30%まで目立った上昇傾向を示しているが、平成元年には1/3の10%に減少している。豊田市駅周辺は昭和59年から、その他も昭和62年から大きく減少している。

贈答品は三河豊田駅周辺と豊田市駅周辺の変化が相反したものになっている。前者は昭和62年の45%以上から平成元年の20%に半減し、一方豊田市駅周辺は同様に10%から20%に増加している。

買回品と贈答品については、豊田そごうの出店後は三河豊田駅周辺への集積度が減少し、豊田市駅周辺へは増加している。このことから、豊田市駅西口再開発事業の成果が明白に現れていることがわかる。

なお、最寄品が近年減少しているのは市内各地区に郊外型ショッピングセンターや生協が開店したことにより、居住地近くで買物ができるようになったためである。

3. 中心市街地の位置づけ

中心市街地の整備希望を3つまで聞いた。駐車場を増やしてが57%、道路整備が55%で他の項目を引き離

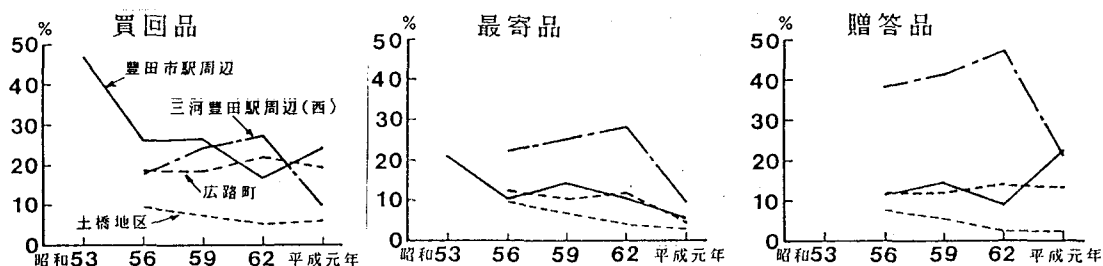


図-1 地区別吸引力

表一 数量化理論Ⅱ類による分析

説 明 変 量		ス コ ア レ ン ジ	
		男 性	女 性
現在について	日常生活の中で自然に触れる機会が多い	1. 4 1 4 7	2. 3 8 5 8
	郊外に行くと豊かな自然に触れることができる	1. 1 5 7 5	1. 9 1 1 3
	豊田市にとって田園地帯も重要な自然の一部	1. 2 4 3 0	1. 2 7 5 3
豊田市駅周辺の都市機能	経済機能	0. 7 0 0 8	0. 8 6 5 3
	商業機能	0. 7 7 8 7	2. 4 0 0 9
	文化的機能	1. 5 3 4 4	0. 7 4 5 8
	娯楽機能	1. 0 6 0 4	0. 7 9 5 3
	公共機能	0. 7 7 2 0	2. 1 3 4 0
	教育機能	0. 5 2 9 9	0. 7 0 9 4
相 関 比		0. 3 3 7 3	0. 2 6 6 8
サンプル数		2 8 1 8	2 8 7 9

して半数以上になっている。楽しめる店の施設を増やすが29%、アケードの設置が27%、公共交通の便をよくするが26%の順になる。回答者が自動車利用による中心市街地の整備を望んでいるのは、中心市街地における自動車交通のスムーズな流れと駐車場の効率的な運用とを目的とした駐車場誘導・案内システムが導入され高い評価は得られてはいるが、(1)特定の施設近くの駐車場に利用が偏っていること、(2)中心市街地に通じる道路や市街地内の道路整備が遅れていること、によるためであろう。

数量化理論Ⅱ類による分析として、豊田市の自然・都市機能の中で将来についての”区域によっては都市開発が必要である”を外的基準として表一に示す8項目を説明変量とした男性のモデルと女性のモデルの2つを考えた。

分析の結果をスコアレンジでみると男性では豊田市駅周辺の文化的機能が低い値になっている。駅周辺には豊田文化産業センターがあるものの劇場としての機能を持つ施設はなく、その整備が望まれているものと思われる。2番目には現在の日常生活の中で自然に触れることができるである。これは、豊田市が地形的条件から、中心市街地を一步離れると田園地帯や山間部となり、自然が身近にある現在の状況を踏まえた自然とのふれ合いを重要視した結果であろう。このことから、市民の男性は自然とのふれ合いを重要視した都市開発を望んでいることが判る。

一方の女性については豊田市駅周辺の商業機能、公共機能が低い値となっている。中心市街地へ来る目的を買い物だけではなく、市役所、銀行などへも行くいくといったいくつかの用件を一つの区域で済ませようとしていることがうかがえる。また男性と同じように現在の自然に恵まれた環境も高い値となっており、特に日常生活の中で自然に触れる機会が多いが高い。

男女共に同じモデルではあったが外的基準に影響を及ぼす説明変量が自然とのふれ合いを除いてまったく異なっている。中心市街地の機能として重要視しているのは男性では文化機能、女性は商業機能と公共機能で、男女違った形で捉えていることが判った。

4. まとめおよび今後の課題

これまでの都市再開発は中心市街地の機能を商業中心に考えてきたが、本分析で明らかになったように豊

田市の消費者行動が中心市街地の都市再開発事業完成前後で買回品、贈答品は三河豊田駅周辺の集積度が減少し、豊田市駅周辺に移ってきたことが明らかになった。都市開発をするにあたっては、(1)住民の自然とのふれ合いを大切にする、(2)中心市街地の機能の位置づけが男性と女性では異なり、男性の文化機能、女性の商業機能、公共機能を今後どのように調和させ魅力あるものにしていくのが課題となる。

豊田市では、全市的に”緑ゆたかな、くるまのあう、ふれあいのある都市”をキャッチフレーズに都市づくりをすすめており、数量化理論の結果もそのようになっている。中心市街地は、各都市固有のイメージを充分反映させるような整備が必要であることが示された。

本研究を実施するにあたり、資料提供等で豊田市役所の協力を得たことを記して感謝したい。

【参考文献】

愛知県：広域商業圏動向調査（昭和52年、55年、58年、61年）